

ロシア語に堪能で情報蒐集にも長けた

川上 俊彦

初代駐ポーランド公使

外交史家・法学博士

松村正義



【かわかみ・としつね(1861～1935)とその時代】1900年川上、ウラジオストク駐在貿易事務官に着任。1904年日露戦争。1905年旅順攻略、水師堂会見。1909年伊藤博文暗殺。1914年第1次世界大戦。1917年ロシア革命。1918年ポーランド共和国独立。1919年ヴェルサイユ講和条約。1920年川上、初代駐ポーランド公使。1923年川上・ヨッフェ会談。1935年川上死去。

(写真・外務省外交史料館所蔵)

「約 40分間港内ヲ砲撃セシモ、守兵応戦セズ」――。

日露戦争の開戦から1カ月近い1904年3月6日、上村彦之丞(海軍中将)司令官の率いる巡洋艦「笠置」と「吉野」の第二艦隊は、要塞化されたウラジオストク軍港の東側のウスリー湾洋上約10キロメートルの砲撃点から同軍港内の造船所目がけ、午後1時50分ごろから約40分間にわたって艦砲射撃を行った。

そしてこの攻撃に「情報」で貢献したのが、当時貿易事務官としてロシアに駐在していた川上俊彦である。日露戦争に向けた情報活動の功績で海軍から感謝状

しかしこのとき、奇妙なことに大規模な要塞からは一発の応戦もなかったという。その謎は、それから

97年を経た2001年5月、一般開放されたウラジオストク軍港を筆者が訪れた折、同地の極東国立大学歴史学部の某教授の案内で同軍港の周辺を一巡した際に解けた。

つまり、ロシア側は日本と開戦した場合、南西方向に位置する日本軍は軍港の北側か南側、もしくは西側から襲撃してくるものと思ひ込み、それらの三方向に対しては堅固な大要塞を構築したものの、東側から迫る日本軍の攻撃は想定せず、全くの無防備であったのだ。

日露間の情勢が次第に緊迫化していく中、川上は日本海軍からの要請を受けて諜報員を使ってウラジオストク軍港周辺の要塞状況を調べ上げ、その東側が無防備であることを東京へ報告していたのである。この功績から、戦後川上には、海軍から感謝

状も贈られたのであった。

乃木・ステツセル將軍の 歴史的会見で通訳を務める

1861年12月、新潟県岩船郡村上本町に生まれた川上俊彦は、東京外国語学校露語科を卒業後の1884年、外務省雇となってロシア関係業務に従事する。そして1900年9月には、貿易事務官（ロシアは日本領事館の設置を認めず、貿易事務館とせざるを得なかった）としてウラジオストク勤務に就く。

やがて日露間が風雲急を告げていき、まもなく国交断絶が近いと伝えられるや、川上は当時数千人に及んだという日本人のシベリア居住者の引き揚げに辣腕をふるう。そして開戦直前まで、ロシア海軍に関する多くの情報を蒐集し、東京に送ったの

である。川上が収集した情報による一つの結果が、先のウラジオストク要塞の攻撃であったといえよう。

川上は、日露戦争開戦後の1904年9月には外交顧問として遼東守備軍司令部付きとなり、中国・金州へと移る。同守備軍司令部は11月15日大連へと移ることになるが、その際、大連市内のロシア名の通り名や町名を改名する会議が開かれた。この会議に参加した川上が、伏見台・山県通・大山通・児玉町などと改名していったことは、ほとんど知られていないようである。

その後川上は満州軍総司令部付となるが、翌1905年の元旦早々に難攻不落を誇った旅順要塞が日本軍の手に陥落する。翌2日に旅順開城条約が成立し、5日には旅順の北近郊にある水師營の民屋で乃木希典將



川上は日露戦争を前に情報蒐集を命ぜられる。本書
簡はロシア側の厳しい監視・検閲の状況から特別暗
号の作成を相談したもの。(外務省外交史料館所蔵)

伊藤博文暗殺の 現場に遭遇

対面する乃木將軍のすぐ
右横後ろに立つ、フロツ
クコートを着、脚には
ゲートルを巻いて山高帽
を被った人物が、川上で
ある。

日露戦争後の1907

軍とステッセル將軍との会見が行わ
れることとなった。その時、ロシア
語通訳を務めたのが誰であろう、川上
俊彦であった。歴史に名を残す日露
両將軍のこの有名な会見シーンは、

今も明治神宮・聖徳記念絵画館内に
飾られた壁画の中に見出すことがで
きる。荒井陸男画伯によって描かれ
た旅順開城の絵図で、白馬から降り
たステッセル將軍と軍刀を杖にして

年2月、川上はハルビン総領事を命
ぜられて、同地に赴任する。ところ
が、その2年半後の1909年10月
26日午前10時、思いがけない一大事
件がハルビン駅頭で突発した。

それは、同月18日に東京を発って
満州に渡来した元老・伊藤博文が、日
露戦争の戦跡などを訪ねた後、26日
にハルビン駅に停車中の東清鉄道の
列車内でロシアのウラジーミル・コ

コフツォフ蔵相と会談した時のこと
であった。伊藤・ココフツォフ両氏
は、日露戦争後に結ばれた第1次日
露協約によって緊張緩和を見せはじ
めた満州における日露関係について
意見交換を行ったが、この会談終了
後、伊藤が列車からプラットフォーム
に降り立ったところを、韓国人の
独立運動家・安重根(アンジュングン)
命したのである。そして、ハルビン
総領事として伊藤の遭難現場に随伴
していた川上も、その側杖を食って
肩に被弾し、重傷を負った。

初代の駐ポーランド公使として

ハルビン総領事を務めた後の川上
は、1912年5月にモスクワ在勤
となって再びロシアの地を踏んだ後、
翌年12月満鉄理事を経て、1920
年には初代駐ポーランド公使となる

のだが、その背景には第1次世界大戦（1914～1918年）が世界にもたらしたいくつもの大きな変革の波があった。1917年10月のロシア革命によるソヴィエト社会主義政権の誕生がそうであり、また、1919年6月のヴェルサイユ講和条約の調印によって成立したポーランドをはじめとする東欧や北欧諸国の独立宣言がそうである。

当時、戦勝国側の一国であった日本は、新生ポーランドの国家と政府を同講和会議中の3月22日に承認している。そして、翌1920年11月、初代駐ポーランド特命全権公使に任命されたのが川上俊彦であった。この川上の公使就任は、ロシア帝国崩壊をもたらし、ロシア革命の中で、ポーランド独立運動に関係する人々と少なからずかわりがあったため

ともいわれている。

そして3年後の1923年1月、公使の任を終えて帰国した川上を待っていたのが、いわゆる「川上・ヨッフエ会談」であった。それは、新ソヴィエト政権と国交を開始するための予備交渉として、川上が同年6月28日から1カ月余にわたり東京で同政権の代表アドルフ・ヨッフエと会談したものである。しかし、主たる懸案事項だったニコラエフスク虐殺事件に対するソヴィエト政権の謝罪や北樺太の日本への売却問題のほか、共産主義宣伝の禁止などをめぐって折り合いがつかず、結局は、議事録を作成するだけで終わった。

川上は、翌1924年12月に外務省を退官し、その後は1926年に北樺太鉱業株式会社取締役会長、翌年に日魯漁業株式会社社長を務め、

1935年9月12日に死去する。享年73歳であった。思えば、乃木希典、伊藤博文、ヨッフエという重要人物と接し、近代日本の歴史的場面に立ち会った外交官の一人でもあった。

【参考文献】西原民平編『川上俊彦君を憶ふ』（北樺太鉱業）／参謀本部編纂『明治三十七八年日露戦史』第一巻（東京偕行社）／稲葉千晴『日露戦争前夜のウラジヴォストーク…対ロシア諜報活動』『都市情報学』第五号（名城大学都市情報学部）／松村正義『日露戦争100年』新しい発見を求めて（成文社）／エヴァ・パワシユールトコフスカ、アンジェイ・T・ロメル共著『日本・ポーランド関係史』（彩流社）

松村正義 まつむらまさよし

1928年福井県生まれ。東京大学法学部卒。1952年外務省入省。1970年ニューヨーク領事。1975年国際交流基金勤務。1979年法学博士。1985年コロンビア大学東アジア研究所客員研究員。1988年帝京大学教授。2003年日露戦争研究会会長。主な著書に『日露戦争と金子堅太郎—広報外交の研究—』（新有堂）『ボツマスへの道—末松謙澄とヨーロッパの黄禍論—』（原書房）、『新版 国際交流史—近現代日本の広報文化外交と民間交流—』（地人館）、『日露戦争100年—新しい発見を求めて—』（成文社）他、論文も多数。

外務省外交史料館

〒106-0041 東京都港区麻布台1-5-3
TEL: 03-3585-4511
<http://www.mofa.go.jp/mofaj/annai/honsho/shiryo/>